



布からモノの働きを知る

せきもと てるお
関本 照夫

民博 先端人類科学研究部

わたしたちは今、「布と人間の人類学的研究」というプロジェクトを新しく始めたところである。これは、民博が進めている機関研究「マテリアリティの人間学」の一環となる。布の人類学的研究、さらには布と人間の人類学的研究といっても対象は広く漠然としている。何を目標しているのか。

布の風合

「風合・ふうあい」ということが、布について語るときよく使われる。布に手で触れたり身にまったりして、柔らかさ、ざくつとした感じ、その他なんでも身体に感じる感触から「軽い風合」、「しなやかな風合」、さらには「涼しい風合」、「麻のような風合」など、さまざまにいう。触感に限られている訳でもなく、色、柄その他見た目の感じ、匂いなどあらゆる感覚を含んだ総合的なことばである。身にまとして涼しいのか暖かいのかも風合の内だ。もし英語にするなら「フィール」が近いのだろう。手にとり身につけて使うモノを、人はすべて総合的感覚で捉えるのだが、布について特にいわれる「風合」ということは、布とのつきあいに肌で感じる微妙で多様な感覚が欠かせないことを、よく示している。

布が人に働きかける

博物館・美術館で布が展示されていたとする。目で眺めるだけでは何とも物足りないのだが、しばしば「手で触れないでください」という注意書きがつけられている。見るだけでなく、手にとり指先に触れ、裏を返し、さらには掌に重さ・軽さを確かめ、腰に巻いたり肩に羽織ったりしてみても、ようやくほんとうに「見た」ことになるのが布である。



ジャワのスタンプバティック職人

布は帆船の帆にもなり、工業用にも使われるが、まずは身につける布から考えたい。単に身につけるといふより、産着から吊いまで、一生涯を包んで人から離れないものである。人の外部にあって人が利用するものというより、個々人にとってもっとも身近な環境の一部、まるで意志をもって人に働きかけるような存在である。モノと人の相互作用を考えるのに、布はありふれて身近なものだが、とても興味深い研究の材料を与えてくれる。

ここまでのいきさつ

わたしを含めたこの機関研究プロジェクト



北タイの村、男の織手は少ない

係でつながり、何のために布を作っているのか、技はどのように世代を越えて受け継がれるのかという研究である。また、わたし自身がインドネシア・ジャワ島のバティック（更紗）をめぐる研究をしてきたように、特定の地域の特定の布に焦点を当てた、いわゆるモノグラフィ的研究が多く生み出されている。

研究の目標

今始まったわたしたちのプロジェクトが目指しているのは、第一に、「モノ」としての布の研究とそれにかかわる「人」の研究とをつなぎ、モノと人の相互作用を考えることである。人がどう布を作り使うかという一方的な見方ではなく、布の人に与える作用・影響をも含めたふたつに切り離せない関係を突き止めたい。先に触れた風合ということも、そのひとつのヒントである。布の消費者だけではなく、作る人も売る人も素材や製品に影響され、全感覚を通じてモノや環境と交流している。このことをもっと見通しの良いことば・概念で語るにはどうしたらよいか。第二に目指すのは、個々のモノグラフィ的研究を横につないで、

布をめぐる人類学的研究の見方・方法をより大きな見取り図に示すことである。最近では学生や若い研究者のなかに、手仕事、工芸、物づくりに関心を寄せる人が増えている。そのあいだに生産的対話を育てるにも、こうした作業が必要である。人にだけ、その思考能力だけに主役の座を与えるのではなく、モノや環境から人が作り出されるもの、モノや環境から人が作り出されるもの、ことを、より説得力のあることばで示し、人類学や人文社会科学を越えた広い貢献ができる研究を目指している。



ラオスの国内難民村に開いた布市場

機関研究
マテリアリティの人間学
「布と人間の人類学的研究」
2011年1月〜2013年3月
代表者・関本照夫